

PAC 分析学会

第4回大会
プログラム・発表抄録集
2009年12月11日（土）

横浜国立大学

大会会場へのアクセス

横浜国立大学

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1

TEL 045-339-3167（留学生センター研究室直通）

#学内・近隣には十分な駐車スペースがございませんので、お車での来場はお控えください。



●新幹線利用の場合

「新横浜駅」下車→タクシー（約 30 分）または横浜市営地下鉄「三ツ沢上町」下車 徒歩 16 分（正門まで） ルートは下記参照

●電車利用の場合

JR 等「横浜駅」下車→西口からタクシー（約 20 分）または横浜市営地下鉄「三ツ沢上町」下車 徒歩 16 分（正門まで） ルートは下記参照

●飛行機利用の場合

京浜急行（20-25 分）「横浜駅」下車→西口からタクシー（約 20 分）または横浜市営地下鉄「三ツ沢上町」下車 徒歩 16 分（正門まで） ルートは下記参照

※ なお、横浜駅（西口）からは、少し時間がかかりますが、バスを利用する方法もあります。その方法については次頁をご覧ください。（所要時間：約 30-40 分）



地下鉄「三ツ沢上町」からの徒歩ルート

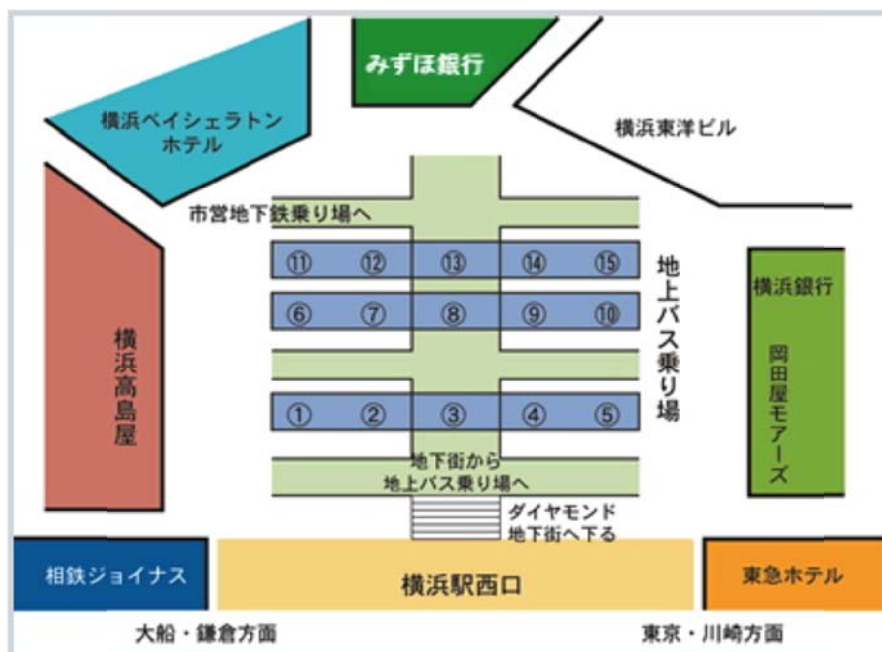
http://www.ynu.ac.jp/access/train_front.html

三ツ沢上町駅 改札を出て右側「2番出口」の階段を登ると、国道1号沿いに出ます。「2番出口」を出て右方向へ進み、国道1号沿いを3分ほど歩いてください。三ツ沢上町交差点の歩道橋に出ます。

そのまま歩道橋を真っ直ぐ渡り、国道沿いを進み、「第三京浜道路入口」の下をくぐる「地下道」に入ります。「地下道」を出たら、さらに真っ直ぐ約7分ほど歩いて下さい。「岡沢町バス停」に着きます。

「岡沢町バス停」の右方向に見える階段を登りきった右側が正門になります。正門から目的地まではキャンパスマップ（リンク先：/access/map_campus.html）をご覧ください。

バス（横浜駅西口から）のアクセス



※バスの乗車時間は15～20分です（目安）

横浜市営バス

乗り場	行き先	下車停留所	大学への入口
11	循環外回り202系統横浜駅西口行	横浜新道または岡沢町	正門・南通用門
14	循環内回り201系統横浜駅西口（松本経由）行	横浜新道または岡沢町	正門・南通用門

横浜市交通局 横浜市営バス時刻表へ（リンク先：<http://navi.hamabus.jp/>）

相鉄バス

乗り場	行き先	下車停留所	大学への入口
10	浜10系統横浜国大行	横浜国大	南門
10	浜5系統 交通裁判所循環横浜西口行	岡沢町	正門

* 横浜国大行 でも「岡沢町」を下車し、正門からお入りください。

キャンパスマップ



会場：教育文化ホール 中集会室
(図中2の建物になります)

大会参加者へのご案内

1. 受付

受付は大会会場（教育文化ホール 中集会室）前になります。事前に参加希望の連絡をされた方は受付で参加費等をお支払いいただき、参加証とプログラム・発表論文集をお受け取りください。

当日参加の方は当日参加申込書にご記入ください。その後、参加費をお支払いいただき、参加証とプログラム・発表論文集をお受け取りください。

2. 喫煙について

所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。

3. 参加証（ネームプレート）について

参加証はお帰りになる際にお返しいただきますよう、お願い申し上げます。

4. 大会参加費について

本大会の参加費は以下の通りです。

学会員：一般会員 2000 円

学生会員 1000 円

非会員（当日一般）5000 円

非会員（当日学生）1500 円

懇親会参加費用：実費（懇親会場にてお支払いください）

発表者へのご案内

1. プログラム・発表論文集への論文掲載に加え、発表会場での発表によって正式発表と認められます。
2. 1 演題の発表時間は 20 分で、10 分間の質疑応答を設けます。係員が下記のようにベルを鳴らして時間を知らせます。
発表開始 15 分後（残り 5 分）・・・・・・・・ 1 鈴
20 分後（発表終了）・・・・・・・・ 2 鈴
30 分後（演題終了）・・・・・・・・ 3 鈴
3. 発表は座長の指示に従って進めてください。
4. 責任発表者が欠席した場合、発表取り消しとなります。連名発表者がいる場合には、大会事務局の承認を得て発表を代行することができます。
5. PowerPoint にて発表される場合、Windows PC は用意しておりますが、Macintosh PC は用意しておりませんので、その場合には発表される先生ご自身で発表用の PC を持参されるようお願いいたします。なお、操作は発表者が行うこととなりますので、その点についてもご了承ください。
6. 当日配布資料がある場合にはその旨ご連絡ください。資料の印刷は大会会場ではできませんので、発表者が用意していただきますようお願いいたします（資料は 30 部程度ご用意願います）。

大会行事

本大会行事は全て教育文化ホール中集会室で開催されます。

12：30～ 参加受付

13：00～13：05 開会の辞

13：05～15：05 大会企画

「PAC分析のデータを実施者・被検者・第三者が共に語り合うデータセッション」

(企画：小澤伊久美 (国際基督教大学)・丸山千歌 (横浜国立大学))

内藤哲雄 (信州大学)・能智正博 (東京大学)・丸山千歌 (横浜国立大学)・小澤伊久美 (国際基督教大学)

15：05～15：20 休憩

15：20～16：50 口頭発表

座長：岸 太一 (東邦大学)

発表者：嶽肩志江 (横浜国立大学)・坪根由香里 (大阪観光大学)・小澤伊久美 (国際基督教大学)・八田直美 (国際交流基金日本語国際センター)

「PAC分析と質問紙調査の併用によるノンネイティブ日本語教師のビリーフ研究—あるタイ人教師の事例より—」

土田義郎 (金沢工業大学)

「俯瞰夜景に対する心理的評価構造に関する研究」

小熊貞子 (東京農工大学)・遠藤藍子 (昭和女子大学)・田仲正江 (東京国際大学)

「教師の自己成長を促すピア-PAC分析—PAC分析の応用可能性—」

16：50～17：00 Brief Discussion

17：00 閉会の辞

18：00～19：30 (予定) 懇親会

(会場は当日の参加状況をもとに決定します)

大会企画・発表抄録

【PAC分析学会第4回大会 大会企画】

PAC分析のデータを実施者・被検者・第三者が共に語り合う データセッション

内藤哲雄・能智正博・丸山千歌・小澤伊久美

(企画：小澤伊久美・丸山千歌)

1. 企画趣旨

PAC分析法を活用する際に、実施手順や統計処理といった側面同様にインタビューのありようやデータの解釈にも丁寧に目を向ける必要があると感じていますが、なかなかじっくりとデータと向き合い、解釈を検討し合ったりインタビューのあり方との関係を振り返ったりする機会がありません。

そこで、今回は、内藤先生が以前デモンストレーションとして実施なさったPACインタビューのデータをもとに、インタビューのありよう（インタビューを受けた側の発話だけでなくインタビューの関わり方、お互いのボディラングージ等々を含めて広い意味で）の特徴に焦点をあてて考察するとともに、このインタビューから私たちがどのような点についてどのように理解を深めることができるかを具体的に議論できればと思います。

2. 本企画の構成

企画趣旨説明	丸山千歌
PACインタビューの技法について	内藤哲雄
今回共有するデータの概要紹介	丸山千歌
データについての考察	能智正博・丸山千歌・小澤伊久美
ディスカッション	

3. 今回共有するPACインタビューの概要

実施時期：2009年2月14日（この日はデモとして限られた時間の中での実施となった。）

所要時間は、刺激提示から連想語を書き出すまで 約35分間

重要度順に並べ終えて非類似度評定を終えるまで 2時間強

インタビュー 約2時間

実施場所：横浜国立大学留学生センター

「第三回 PAC分析と日本語教育研究会 —PAC分析実施法ワークショップ：
聴取技術の実際—」において聴取技術のデモンストレーションとして実施したもの

実施者：内藤哲雄

被検者：小澤伊久美

手続き：内藤哲雄『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待 改訂版』（2002）に従ってPAC分析を実施。非類似度評定は1回のみ。

使用分析ソフト：HALBAU 7（ワード法）

連想刺激文：あなたは帰国子女や継承語学習者への日本語教育にはどのような特徴や問題点があると感じていますか。またあなた自身がこれらの学習者に行っている日本語の教育の中で感じ

連想語一覧

連想語	連想順	重要度順	
論理的思考	1	5	+
アイデンティティ	2	6	+
自己／自文化肯定感	3	16	+
異なるケア	4	8	+
言語政策	5	42	○
個別の対応	6	2	+
在米イラン人	7	44	-
generation gap	8	33	-
社会にとって役立つ	9	27	+
否定的評価	10	7	-
評価基準と目的	11	9	○
自分との接点	12	25	+
文脈・目的	13	26	+
知られていない／理解されていない	14	11	-
親の役割	15	32	-
学習言語	16	4	○
プログラムデザイン	17	21	○
行政との交渉	18	30	-
国を背負う	19	28	-
教材	20	17	○
動機付け	21	24	+
歴史	22	29	-
スタイルの使い分け	23	43	○
自分らしさの表現	24	15	+
年少者と大学生の違い	25	36	○
進学・就職	26	38	-
予算	27	31	○
ネットワーク構築	28	35	+
基礎的知識	29	41	○
基本的文献	30	39	○
基礎的調査	31	40	○
自己認識	32	20	○
自律学習	33	22	○
学び合い	34	23	+
教師の役割	35	3	○
狭義の日本語教育にとらわれない	36	1	-
他科目との有機的なつながり	37	18	+
プレースメントの難しさ	38	10	-
マイノリティであること	39	12	-
インターのみで育った学習者	40	13	-
中等教育で統一されたカリキュラムがないこと	41	34	-
英語が得意でない場合のケア	42	37	-
フィードバックの与え方	43	19	○
大学が提供するプログラムが持つ制限	44	14	-

同行し間主観的に了解する PAC 分析

信州大学人文学部 内藤哲雄

~~~~~

PAC 分析の PAC は、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略称であり、“パック”と発音される。現在では、利用の仕方によっては、認知やイメージの構造、心理的場、アンビバレンツ、コンプレックスまで測定できることが確認されている。この分析法は、当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。

PAC 分析の統計的側面(被検者 1 名でのクラスター分析)での価値を実感できる人は多い。しかし、その背後には実験計画の発想があり<sup>注1)</sup>、カウンセリングなどの臨床のアプローチが存在していることを看過する人が少なくない。今回のワークショップでは、PAC 分析での分析効果と了解可能性を高めるのに不可欠な技術として、内面深くを探索するためのインタビューでの聞き取り方、同行しながらイメージを誘導する技法、総合的考察の仕方について取り上げたい。

<sup>注1)</sup> 現象の解明には、対照群との比較とか、複数の条件群間の比較、あるいは先行研究との比較が求められる。そこで実験(調査)計画での要因配置などの考え方が不可欠となる。PAC 分析の実施に際しては重要な事項であるが、今後の講演やワークショップで取り上げることにしたい。

~~~~~

操作的・実験的・記述統計学的手法と

間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法を併用する PAC 分析

実験計画と統計が分かる人で、臨床でのカウンセリングに習熟している人は少ない。逆に、臨床家で、実験(調査)を立案し、統計データを正確に読み取ることができる人は少ない。

PAC 分析は、従来の多標本調査で析出される共通尺度の組み合わせでは迫れないもの、要因や条件が相殺されることのない個々の事例を質的に分析する。

PAC 分析では、単一事例の質的分析に、<まるで実験や調査のように、>客観的操作（刺激文や手続を明確に決定＝同じ手続を繰り返すことができ、再現性が高い）、統計技法（数量化し統計学的ルールに従って処理＝操作化、客観化しており再現性の高い分析法）を利用している。科学的水準の高い事例分析技法である。単一事例を多変量解析で分析する方法に価値を認める者は多い。

知的論理的な処理から、感覚の探索、イメージの探索へ

ところが、被検者自身が気づいていない内面深くの質的構造を探索するためには、探索の構えを知的

論理的な処理から、感覚の探索、イメージの探索へと変えることが求められる。また、検査者が同行し休息や間をとることで、内面深くへの侵入を促進することが求められる。

<連想反応>

連想反応(連想項目)は、被検者一人ひとりに併せて作成された調査項目ということができ、被検者自身の内面の感覚に合致する内容が連想されるならば、当該被検者の内面深くの構造を浮かびあがらせるのが容易になる。

<クラスター>

クラスターは連想反応のまとめりとして命名され、デンドログラム全体の構造や現象のメカニズムについての解釈の素材となる。それとともに、クラスターは連想のレベルをより深めるための**連想刺激**の働きをする。連想項目がクラスターとして束になった時の**連想価**は桁違いである。クラスターを連想刺激としてイメージの探索を深めることができるかどうかは、潜在構造の解明を左右する。**クラスター間の関係に関するイメージはメカニズムの鮮明化**に直結する。

意識的な探索をしたことがないとか、防衛が関与している場合には、突破のためにかなりのエネルギーと時間を要する。前者は、関連するエピソードなどをまとめ上げる単語や言語との連合（その内容に関しての、感覚・感情の領域と思考・言語野の領域の連合）が、脳内に形成されていないからである。後者は、自我防衛による（脳内ネットワークへの妨害的情報の侵入）抑制である。

<連想項目の単独イメージ>

1つ1つの連想項目のイメージを探っていくと、当該被検者にとっての様々な連想的意味、エピソードが想起される。連想項目が持つ(当該被検者にとっての)意味は、辞書の意味だけではなく、連想的意味や体験的意味によって、他の連想項目とのつながりを持っている。上段のクラスターのイメージ探索では、同一クラスターの他の連想反応との関連から探索するのに対して、単独イメージでは、いったん他の連想反応との関連枠組みを離れて探索する。長期記憶へのアクセス、エピソード全体のイメージ想起、記憶から蘇る感情の喚起には、時間が必要。論理的情報処理のスピードでは検索できない。

感覚・イメージを想起させるための技術

①刺激文を読み上げる、②クラスターを読み上げる、③クラスターから生じるイメージを同行しながら探索させる、④クラスター間を比較させる聴き方、⑤クラスターの単独イメージの聴取、⑥項目の＋－のイメージをたずねる時の技術が、とても重要となる。

しかし、被検者の統計データの解釈に被検者自身のイメージを利用するという技法（現象学的データ解釈技法）になじむことができず、説明しても、実演しても聞き流されてしまうとか、忘れられてしまうことが多い。現象学的データ解釈技法の使用を繰り返すことでしか、重要さを実感できないようである。

<論理的情報処理から感覚を喚起し、感情に浸る処理への転換>

- ・読み上げの速度や抑揚
- ・準言語の活用
- ・イメージ喚起や探索のスピードや間に合わせる

→ 検査者自身が、自身に生じる感覚やイメージを利用する（自身を道具として）

○被検者を同行させながらイメージする／イメージの誘導

（連想刺激の読み上げ、クラスターの読み上げ、繰り返し技法、イメージ喚起を促す指示「他にはどうですか?」、連想反応の読み上げ）

○被検者に同行しながらイメージする

（習熟すると、検査者が実際にイメージしなくても「所要時間」や「間」が合うようになる）

○被検者の探索作業を共に感じる

（上を見上げたり、指を動かしたりなど、被検者の非言語行動を観察していると、被検者の探索行動そのものを共感するようになる。待つことに飽きない）

<被検者のイメージ(解釈)と統計的結果の総合的解釈>

①デンドログラムの結節(クラスター)を読む→被検者のクラスターのイメージの記録を読みながら感じる→連想項目単独でのイメージを読みながら感じる→+-イメージを読み取る→②デンドログラムの結節(クラスター)を読む→被検者のクラスターのイメージの記録を読みながら感じる→連想項目単独でのイメージを読みながら感じる→+-イメージを読み取る→③デンドログラムの結節(クラスター)を読む→被検者のクラスターのイメージの記録を読みながら感じる→連想項目単独でのイメージを読みながら感じる→+-イメージを読み取る、の作業を繰り返す。

実感し共感する作業を繰り返すうちに全体のイメージが湧いてくる。④デンドログラムの結節(クラスター)を読む→被検者のクラスターのイメージの記録を読みながら感じる→連想項目単独でのイメージを読みながら感じる→+-イメージを読み取る→⑤デンドログラムの結節(クラスター)を読む→被検者のクラスターのイメージの記録を読みながら感じる→連想項目単独でのイメージを読みながら感じる→+-イメージを読み取る。次第にイメージがはっきりしてくる。

被検者の連想項目、被検者がクラスターや項目単独のイメージについて話した中での単語や項目を活かしながら、できるだけ**被検者の言葉そのままを組み込んで**、全体を総合的に記述する。ほとんどは被検者の言葉を繰り返したただけのように感じられるほど、被検者の言葉を活かす。このようにして、被検者のイメージや解釈とクラスター構造を統合していく。そのとき、**検査者の同行に支えられ、被検者は自身の内面を探索し、気づき、豊かな言葉で語ってくれていたことを実感できる**でしょう。

PAC 分析のプロセスについての感想

東京大学大学院教育学研究科 能智正博

今回 PAC 分析におけるインタビューの過程を細かく見せていただき、小澤先生のもっている態度やイメージの構造が1回のセッションから鮮やかに浮かび上がってきたことには非常に感銘を受けた。細かい点で工夫された PAC 分析の技法や手続きが、そうした構造に関する手がかりを客観的な立場から取り出し、信頼性の高い結果を導くのに貢献しているように思われた。近年、調査インタビューの方法や技法については様々な立場からの議論が深まっているが、今回の発表ではそうした議論も参考にしつつ、PAC 分析のインタビュー手続きについて気がついたところをいくつか述べておきたい。

連想刺激文に基づく自由連想

PAC 分析では、連想刺激文に対する自由連想というところからデータの収集が開始されるが、完全に「自由」な連想は一般的に言ってなさそうに思われる。精神分析における自由連想でさえ、分析に対する期待などによって連想の方向づけは限定される。大事なのは、そこでの「自由さ」がどういう限定のもとでの自由さであり、対象者の反応にどういう条件が関与しているのかを意識しておくことではないか。

調査インタビューの場合には、研究者が提示する研究テーマが方向づけに関与するが、さらにそれを研究対象者がどう理解し、意味づけたのかが重要である。調査者の意図と研究対象者の理解が食い違っている場合には、どこかでそれを修正していく機会があった方がよいように思われる。

PAC 分析で研究テーマが端的な形で示されるのは、連想刺激文においてである。今回の刺激文についても、小澤先生が刺激文をどのように理解したのか尋ねてみたい。たとえば、「継承語学習者」と「帰国子女」が同時に言及されているが、これらは小澤先生にとってひとくくりにして論じられるものだったのだろうか。門外漢である筆者にはずいぶん違っているものに思われるが。

同行するインタビューの技法

近年のインタビュー論においては、インタビューがインタビュアーとインタビュイーの協働によって達成される出来事であるという視点が注目されている。インタビューの結果を理解するためには、その協働がどのような性質をもっているかを理解しておくことが不可欠であるとされる。

PAC 分析におけるインタビューでは、研究者が対象者の語りを反復しながらゆっくり話を聞くというやり方が特徴的である。これは、対象者が自らの内面を探るのに必要な時間と構えを確保するために必要なアプローチであり、研究者が対象者に寄り添い、イメージの探索に同行する技法として有効と思われる。しかしその一方で、こうしたやり方は日常的なコミュニケーションとはテンポもやりとりの特徴もかなり違っているため、対象者は慣れるまでに多少とまどったりいらいらしたりすることもあるのではないだろうか。

小澤先生はそうしたやり方にすぐ慣れて、インタビューは手際よく進んでいったように見える。おそらく多くの対象者はそうなるだろう。ただこのとき、何かに寄り添っているのは研究者だけではないように思われる。対象者もまた、研究者の提示したやり方に寄り添うことでインタビューが進んでいく。これもまた、一種のインタビューにおける協働のかたちとして理解できるのではなかろうか。こうした協働がうまくできるかどうか、分析の成否を左右するように思われる。

「課題」への対処の個人差

PAC 分析におけるデータ収集の過程には、ところどころ非日常的で困難に感じられる課題が含まれるように感じられた。人によっては、連想語間の類似度評定もクラスターからのイメージの生成も、経験したことの無い難しい課題と感じるかもしれない。イメージされた語それぞれについて、「+、-、ニュートラル」を判断するのも、考え始めるとけっこう悩んでしまいそうである。困難な課題への対処は個人によってしばしば違って来るだろうし、対処の仕方が違えば、得られる応答もそれに対する分析結果も異なったものになる。たとえば、類似度評定の仕方に関しては、クラスター分析の結果にすら影響を与える可能性がある。

クラスターからのイメージの生成に関して言えば、個々のクラスターに一見異質に感じられる要素が含まれることはまれではない。たとえば今回見せていただいたデモンストレーションでは、「アイデンティティ」に始まるクラスターにおいて、小澤先生自身「行政との交渉」や「予算」が入っていることに違和感を覚えておられたようである。小澤先生のように「これとこれを除外すれば」と言語化してくれる場合には、対象者の対処の仕方は聞き手にとってわかりやすい。しかしそうした説明がない場合、どこからイメージが生成されたのか、解釈がむずかしくなりそうにも思える。

見えない構造を探るための視点

また、PAC 分析においては得られたクラスターを1つの中継点として対象者の語りが得られ、それらを手がかりにクラスターの向こう側にある深層の構造に至ろうとするという点も特徴的である。ただ、深層の構造というのは一筋縄ではとらえることはなかなかむずかしい。精神分析的な無意識が、そんなに簡単に捉えられないのと同じである。PAC 分析は、そんな難しさに抗して1つの道筋を示したものである。

しかし同時に、他の道筋の可能性も質的データの分析においてはしばしば使われているし、そうした方法を併用することで、対象者に関するより豊かな知見が得られるのではなからうか。語りそのものをクラスターとは独立に読み込み、グラウンデッドセオリー法や KJ 法などを参考にして分析した上で、クラスターの解釈を相対化したり補完したりすることも可能かもしれない。以下に、今回の語りを読みながら思いついたいくつかの可能性を示しておく。

語りに反復されるテーマ たとえば、語りの内容を大づかみに捉えたときに、複数のクラスターに関わるテーマが認められることがある。小澤先生の語りにおいては、「孤立」というテーマが認められるように思われたのだが、それは教えられる側の問題でもあり、同時に教える側の問題でもある。教えられる側は、祖国から切り離され親との間にはギャップがあり、現在の社会からは孤立している。同時に教える側も、全体として協力してやる必要があるのにひとりで動いているという局面があったり、あるいは集団で動いていてもより大きな社会の動きからは孤立していたりする。

語り方の特徴 語りの内容よりも語り方にその語り手の特徴が見られることもある。小澤先生の語りでは、教えられる側の問題と教える自分たちの側の問題が相互に照らし合うような語り方をしており、教えられる側の継承語学習者（帰国子女も？）が単なる対象ではなく、常に自分たちのライフ（人生）とどこかで重ね合わせながら意識されている。また、どのクラスターのイメージを語る際にも、他の先

生の顔や学生の「顔」が出てくることが多い。対象としての学生について考えるときにも、顔に象徴されるパーソナルな関係がそれを支えていると言えるかもしれない。

独特の言い回し 語り手の独特の言い回しは、その人の生きている世界を生き生きと表現してくれていることがある。小澤先生の語りにも、たとえば「元気に困っている」「明るく困る」など、一般的にはあまり使われない表現が認められる。「困る」ということに対する独特の感性や概念的把握の仕方がそこに現れているような気がする。「明るく困る」ことができる条件や問題はどのようなものか、逆に「暗く困る」とはどのようなことなのかなどを考えていくことで、個人の問題に対する向かい合い方などが推測できる。

独特のイメージ 語り手の独特のイメージや比喩的な表現もまた、立ち止まって考えてみるとよいかもしれない。今回の語りでは、複数の人生のイメージが語られる。1つは、「人が踏みならした平坦な道に自分がいて、昼下がりの太陽の下で前を見ている」といった水平移動的なイメージと、少しずつ何かを積み上げていくといった垂直移動的なイメージが認められた。場合によって複数のイメージを使い分けながら、自分の人生を位置づけていることが考えられる。

得られた「深層」の確認

そのようにして得られた「深層」の構造は、どのようにして確認されるのだろうか。近年の質的データの分析においては、得られた結果の妥当性の検証としていくつかの方法が提案されている。結果を対象者に返してフィードバックを得るというメンバーチェックという手法はその1つである。今回の分析結果を得て、小澤先生はどのように感じられただろうか、その点については率直なご感想を聞いてみたい気がする。

もちろん、メンバーチェックにおいても、必ずしもメンバーが結果を是認すればよいというものでもない。たとえば精神分析においても、分析家が解釈を提示したときの患者の反応には複雑な心理のダイナミクスが関与しており、患者の言葉の表面的な意味が解釈の妥当性を決めるものではないことはよく知られている。質的研究におけるメンバーチェックの結果もまた同様である。対象者からのフィードバックも1つの語りであり、語られた文脈を考慮しながら、データの一部に組み込んでいく必要がある。

今回の結果もまた、分析の結果に関する小澤先生の感想を1つの手がかりとして、分析を深めていくという方向もありうるのではないか。PAC分析もまた、研究者と対象者の対話の過程である。対話性をよりいっそう生かしていくことで、結果をさらに確かなものにしたりと興味深い論点を取りだしたりできるのではないかと思われた。

内藤先生によるPAC分析インタビューの実践からの気づき

横浜国立大学留学生センター 丸山千歌

今回のPAC分析インタビューは、私と普段やりとりをする小澤さんをインタビューーとしたものである。小澤さんと普段から交流を持つ者で、PAC分析インタビューの実践者を目指す一人という観点から、今回の内藤先生によるインタビューを通して、どのような気づきを得、またどのような点をさらに学びたいと思ったかを以下に述べたい。

1. このインタビューで見られるPAC分析法の特徴についての気づき

同行するインタビューの技法とそれによるインタビューーの変化

インタビュー開始時、おだやかに、しかし理路整然と話す小澤さんのいつもの口調が観察できるが、このとき、小澤さんの発話を繰り返す内藤先生の話すスピードは小澤さんのものよりもずっとゆっくりで、しかも話を繰り返しながら書き取られていた。これにより、小澤さんは、一文を一気に話すことができなくなり、内藤先生が書き取れる分量を調整して発話しはじめた。このような同行の仕方に対し、小澤さんは自分のペースで話を先に進められずにもどかしく感じている様子がうかがえた。それでもなお内藤先生はご自身が聞き取れる分量に区切って、小澤さんの話すペースを調節なさっているような印象さえ持った。

小澤さんのもどかしそうな様子が観察できる、この時間帯に表れる発話に表れる内容は、感覚的でイメージではなく、「配慮」「課題」「実行」などの抽象的なことばで構成されている。この間、内藤先生は、小澤さんの発話を書き取るスピードで繰り返されるほかは、「他には…」という質問以外の、内容についての質問をほとんどしていない。項目を読み直したりすることによって、他のイメージを引き出そうとされている。

CL1のインタビューの中で小澤さんが「目標」ということばを思い浮かべ、到達したいものだけど、まだ道半ばで、その道にたつて（目標を）眺めている自分がイメージできるということを話したときに、「目標とか道半ばというのは」というところで具体的な質問が初めてされた。そのころになって、インタビューーである小澤さんの話す様子が変わってきたように思う。口調もはきはきとよどみなく出てきていた雰囲気から、少し考え、言葉やイメージを探しながら語りはじめた印象がある。そのあたりから、視覚的なイメージが出始めた。また、CL1のインタビューの中で表出してきた「夕日」のイメージについて、内藤先生からは、その道の向こうに見えてくるものが、何かイメージできますか…という質問をされていて、より鮮明なイメージを描き出すための促しがあった。

そして、CL2の話題の中で、CL2のまとめりを小澤さんが「経験しないとわからない」ということばでまとめられると話している頃には、小澤さんは内藤先生が小澤さんの発話を書き取っていることが気にならない様子で、むしろ内藤先生がメモを取られている間、小澤さんは内面と向き合っているように観察されるようになった。インタビュー開始時は、内藤先生が書き終わるのを「待っている」という表情が見て取れたが、この時点で小澤さんの様子には明らかな変化が見られた。

さらにインタビューが CL3 の内容に進むころには、小澤さんの発話のスピードが内藤先生の発話のスピードと同程度にゆったりとしていった。

以上のようなインタビューの変化は、インタビュアーによる同行の技法の影響が大きいように思われる、PAC分析インタビューを名乗ったインタビューであっても、この同行の技法がなければ見られないものではないかと思われた。多くの人に了解されているであろう PAC分析インタビューの特徴は、内藤（2002：15-27）で PAC分析インタビューの下位技法として紹介されている、自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度評定行列とクラスター分析、被検者による解釈・イメージの報告と総合解釈であると思うが、今回の PAC分析インタビューを通して、この同行するインタビューの技法はこれらに加え、PAC分析インタビューを成立させる重要な要素であると感じた。

この証左と言えらると思うが、今回のインタビューの終盤で、終了時間の関係で内藤先生が時間調整のために、ある程度のところで小澤さんの発話を引き取られ次の質問に移られたときがあったが（CL1とCL3の2つのまとまりについての質問の箇所）、これをきっかけにして、小澤さんの口調が再びパキパキしたものに切り替わった印象を持った。インタビュアーのインタビューとの向き合い方が、インタビューの反応に大きく影響を与えていると感じた。この観察からも、同行するインタビューの技法の重要性を強く感じた。

同調しないインタビューの技法

内藤先生の PAC分析インタビューの実践で強く印象に残ったもののもう一つは、多くのインタビューで見られる、インタビューの発話を促すためのアイコンタクトやあいづち、インタビュアーの意思の表明などを、内藤先生が徹底して排除されている印象を受けたことであった。

たとえば、インタビューでの話題が CL3 に進むころに気づいたことであるが、インタビュアーである内藤先生とインタビューの小澤さんは、ほとんど目を合わせていない。それ以降の映像を確認しても、それは一貫した傾向のように思われた。

また、単独のイメージについての質問の中で、「プログラムデザイン」について内藤先生が質問なさる箇所では、小澤さんからの「日本語で何て言うんでしたっけ。」という問いかけが出てくる。多くの会話では、「何のこと？」とか「〇〇のこと？」というように問いかけの意図を確認したり、答えを与えたりして相手の発話を促すように想像されるが、内藤先生は、この発話を「独り言」のように受け止められたかのように、書き取るだけで、小澤さんの問いかけにそれ以上の反応を示されなかった。

この技法もまた PAC分析インタビューの特徴と言えないのではないかと思われたので、徹底してこの技法を採用される理由を内藤先生からうかがってみたいと思う。

2. PAC分析インタビューの具体的な技法についての質問

当日は時間的な制約があって、インタビューの中でさまざまご調整いただいたと感じている。時間的な調整以外でも質問を省略する、インタビュアーが着目した点を取り出して質問するといったことが起こりうると思うし、PAC分析インタビューの手続きの中で、質問の軽重や質問のしかたを変える点にポイントがあるように思われたので、その点をう

かがってみたい。

たとえば、単独のイメージについての質問の中で、デンドログラムに表れる19番目の連想語「アイデンティティ」のときに、初めて「他にはどうですか」と質問なさっているが、これはインタビュアーが注目していた箇所だからこそその質問であるのか。また、デンドログラムの25番目の「在米イラン人」のときに、内藤先生は「これはどうして在米イラン人って言葉が思い浮かんだんですか」と問いかけられたが、この問いかけ方は今回のインタビューで初めての問いかけ方であった。

3. このインタビューの考察のためにインタビュイーである小澤さんにうかがいたいこと クラスターの分け方

CL2 に入ってから、下の2つが CL2 にはいらないと話されていたので、それならどこと関連すると感じているかを、私なら後で聞いてみたい。

単独のイメージ

エピソードがあったら聞きたいと思った箇所は「中途半端なバイリンガル」「寺子屋」「大きく変貌」「留学生とは違う」「Mさんという学生が思い浮かびます」「(自己・自文化肯定感に対して) 自信喪失」「ペルシャ語のクラス」「ジェネレーションギャップ」「自分らしさの表現」「国を背負う」「背負わされる」「(親の役割) 無知、戸惑い、脳天気、心配しすぎ」「マイノリティー同士わかりあう、孤立している」である。

4. その他

SPSS でインタビューをしたらどうなったか、どんなインタビューができそうだったかデンドログラムを見て、想像したい。

PAC分析を受けてみて感じたこと

国際基督教大学日本語教育課程 小澤伊久美

内藤先生によるPAC分析を受けてみて、PAC分析インタビューの実践者を目指す一人という観点から、どのようなことを感じ、またどのような気づきを得たのかを以下にまとめてみた。

1. PAC分析のプロセスを知っていることが被検者としての振る舞いに影響を与えたのではないかと感じた点

連想語の数量 連想語を挙げる段階で、どの程度細かく連想語を書き分けるのか悩んだ。当日お尋ねしたところ、少しでも違ったら違う連想語として書くというご指示だったが、プロセスを知っている者としては、そうしたらかなりの量になって後で大変だという気持ちで働いたことは否めない。比較的書くようにしたつもりだが、被検者がPAC分析を知っている場合にはこのことが影響を与える可能性があるだろう。

デンドログラムの読み取り デンドログラムを提示された段階でも、デンドログラムの読み取り方を知っているため、そこで見た個々の連想項目の関係性がもしかしたら話す内容に影響を与えた可能性もあるだろう（自分の中ではそれほど強くそれがあつたという記憶はない）。

イメージの想起のさせ方・言及のし方 できるだけ思い浮かんだことは全て口にしようがよいということを知っていたので、PAC分析を知らない被検者よりも言葉にして表現しようという意識が強かったと思う。また、場面や色などでイメージを探索することが役に立つことを知っていたので、できるだけそれを思い浮かべるようにしていた。

例えば、道の向こうに太陽が見えると述べた箇所があるが、そこではできるだけその時に思い浮かんだ情景を逃さないように、見えた光景の先に何が見えるだろうかと考えた。理知的に自分の言いたいことをイメージ化しようとしたというよりは、ひたすら目に浮かんだ映像のみに集中してその先に何かあるか考えた感じである。

ただ、太陽が見えたと思った瞬間には、正直なところ、自分の中で、今回関わっていた継承語学習者系の企画を通して自分が周りの人や企画の成否などに対して抱いているイメージがこの情景に現れたような気がしてはっとした。そのようなイメージの解釈なども被検者の語りに影響がないとは言えないように思われる。

そういったことを考えると、PAC分析を知っている被検者に限らず、被検者が連想することが好き（得意）かどうか、思い浮かべたことを語りたがる程度などにもインタビューの成否が影響されるだろうと感じた。

2. インタビューの技法について考えさせられた点

刺激を読み上げるスピード 刺激はこれだけゆっくり読まれても、被検者としては自分の考えをめぐらせながら聞くのであればゆっくりだとは感じなかった。むしろもう少しゆっくりでも問題ないとすら感じられた。

インタビューの語りのスピード 冒頭部分で特に強く感じたのだが、私はさっと答えたいのに、私の発話をゆっくりと復唱しつつ書き取っていらっしゃる内藤先生のペースに妨げられ、とても話しにくかった。質問されて答えたいことがいくつか思い浮かび、次々と答えたいのに待たねばならず、次の話を忘れそうで嫌だと感じた。

そんな感じで、話し始めは内藤先生が対話の相手であると感じていたようだったのが、段々内藤先生の目を見てやりとりをするという感覚が薄らぎ、一人で話しているような感じがしてきた。本当に一人でいるという感じとはまた違うのだけれども、視線を外して話すことが増えたような気がしている。

ただ、今回動画を見直した時に、記憶していた以上にインタビュー後半でも内藤先生のほうを見て、内藤先生のペースにあわせて語っていたことに驚いた。

もちろん当日も、一人で話しているような感じがしてから自分も自分が内藤先生に話しているということ、周りに聞き手がその他にもいるということは意識していた。自分だけに、あるいは職場の者にしかわからないような言葉遣いは避けるように話した記憶があるし、多少細部を言わないようにしたところがあったからだ。例えば、アメリカにいる在米イラン人の話など、長い話になるだろうし、少しプライベートな話になるが刺激で出てきたこととの関連がそれほど強いとは自分には思われなかったもので、時間の関係もあり、簡単に話すのみとした。

その他、内藤先生のインタビューの技法で気付いたこと 「何が思い浮かぶかを感じてみてください」という語りかけが興味深かった。「何を感じますか」ではなく、「感じてみてください。」という問い掛けも有効だろう。

デンドログラムを見ているときの被検者の表情に着目するというお話も、自分自身が唇を動かしたりしているということに全く気づいていなかったのが興味深かった。ただ、いつも被検者を見ていられるわけではないので、書き留めた動作の解釈が偏らないよう留意しなければならないという気もした。ビデオ撮影を被検者が気にしないのであれば表情やしぐさを確認するためにビデオ撮影してもよいかもしれない。

<内藤先生に伺いたい点>

被検者の挙げる個々の言葉について全く質問しない形でインタビューが進むのはPAC分析の特徴であり、被検者が自ら語ったことだけでは解釈が難しい場合は個別質問の時に聞くというスタイルになっていることに関して2点伺いたいことがある。

- (1) 「その他にはどうですか？」と聞くと次々と違う話に展開していく可能性はないのか。発展していった場合、結果として被検者の内面探索が深まるというよりも拡散していく可能性はないのか。
- (2) 内藤先生は、あとで個別質問したいことや気になったことをマークするなどしてメモしていらっしゃらなかったが、個別質問は常に記憶に基づいてなさっているのだろうか。今回は私が内藤先生に質問した文言までメモに残しておいでで、徹底的に被検者の発話のみを書き起こしていらした。それ以外のことは決してメモ

に残さないとされているのだとしたら、その意図を伺いたい。(例えば私自身が今回インタビューを聞き直してみて、「わかってもらったら変わるんじゃないか」という言葉は、「わかる」主体は大人かと思ったが、「変わる」のは何が変わるのだろうと疑問に思った。このような場合にもその場で「何が？」と聞かないほうがよいというご判断をなさったのだろうか。)

3. 解釈について考えさせられた点

被検者が解釈を聞いた時の納得の度合い 2で述べたように、自分が簡単にしか説明しなかったところで特に感じたのだが、インタビュー終了後に内藤先生が示された簡単な解釈を伺った時に、「誤解を招いたかもしれない」と当日感じた記憶がある。

このことについてはまず、インタビューが時間的に非常に限られた中で実施されており、先生も私のプライバシーに配慮なさってじっくり聞き出すということはせずにインタビューを終えられたのではないかということ、きちんとした分析がなされた上でのコメントではなかったということが私が抱いた違和感の原因となっているようにも思うので、内藤先生がもし徹底的にインタビューを実施なさった上できちんと分析・考察をなさったとしたら、どんなことをおっしゃるのか大変興味がある。

また、今回改めてインタビューを視聴してみて、当日思ったほど内藤先生の解釈は外れているというわけではないのだとも思った。例えば在米イラン人の問題についての箇所、「アイデンティティの喪失」といわれると違うような気が当日はしたのだけれども、考えようによっては私が言いたかったことはそういう問題だと言えるのかもしれないと思い直した。自分が、その場で聞いていてもきちんと理解していない可能性があるということと、一方で、自分が断片的にしか述べていない連想語やイメージを使って解釈としてまとめられた際に、自分がその言葉をどんな文脈で使いたかったかということとのずれがあると、違和感を覚えるのかもしれないということを考えた。

当日は時間的な制約があったのでなさらなかったのだと思うが、できるだけ当事者自身に連想したことを解釈して述べてもらうことが当事者の意識の理解を深めるためにも、また、被検者自身に納得してもらえらる解釈を示すためにも重要だと感じた。

被検者自身であってもその時の自分の思いが理解できるとは限らない まず、CL1の話のときに自分が組織のことや周りの人の話をしていたことに軽い驚きを覚えた。この連想語のどの辺りからそういったイメージを連想したのかは今になっては自分自身であっても瞬時には思い浮かばず、少し考えなければならなかった。

CL2の下の方にある二つの項目「行政との交渉」と「予算」については、面白いことに今回はインタビューで自分がそう述べているのを聞き直すまで違和感を感じなかった。言われてみると他と結びつく可能性も考えられると思った。

さらに、この「行政」が何をさすか(大学の行政部なのか国家の行政を指すのか)や、「予算」が何の予算を指すのかはそれぞれに影響を受けて意味するところが変わる可能性があるような気がする。このデンドログラムの中にあると上に書かれた項目にひきずられて国家のほうで書いたように見えるが果たしてそうだったのだろうかという疑問に思う。連想語を書き出している時点と語っている時点とで想起していることが違う可能性、イ

インタビュー当日と後日（例えばフォローアップインタビューを受けた時）とで想起することが違う可能性があるのではないかと思われた。

プラスマイナスの解釈 例えば「狭義の日本語教育にとらわれない」がなぜ「マイナス」なのだろうとか自分でも聞いてみたいような返答があった。「狭義の日本語教育にとらわれている」教育に対して否定的な気持ちを持っている自分としては、この連想語だったらプラスでいいのにと思ったし、想起した状況が自分にとって否定的なイメージのものだからということだろうかと思っただけでなく、また、項目一つ一つについてもその項目の持つイメージ全体としてプラスマイナスをつけたというよりは、一つの項目の内容のどこか一部に焦点があたって評価しているのではないかという感じがした。この回答をどのように分析に生かすかは注意が必要かもしれない。

4. 異なる統計処理にかけてみて感じたこと

SPSS で階層的¹・非階層的クラスター分析²、多次元尺度構成法(MDS)³を実施したみたところ、いくつかの項目でクラスター構成に相違があったが、それはインタビュー時に違和感を覚えたと言っていた「30 行政との交渉」「31 予算」ではなかった。つまり、被検者自身がクラスター構造に違和感を覚えたとしても、それが必ずしも自分が出した非類似度評定と違うからであるとは言えないということになる。あるいは非類似度評定にも判断のゆれが現れているということかと思われる。

これまでに複数の統計処理にかけて相違を見たことがあるが、今回はそれらとも少し違い、非階層的クラスター分析でクラスター数を変えた時に個々のクラスターの構成項目が微妙に変わっていた（表1）。MDSで描かれた刺激布置図（図1）を見てもきれいに分けにくい項目群があり、ストレス値も0.86433とやや低かったことを考えると、非類似度評定に揺れがあり、階層的クラスター分析でロスが大きいのかかもしれないという気がする。

HALBAUの結果と非階層的クラスター分析の結果をCL3の場合でつきあわせてみると、どちらでも自分にとって意味のあるまとまりとして話せるように感じるが、特に「14 大学が提供するプログラムが持つ制限」と「37 英語が得意でない場合のケア」については非階層的クラスター分析が提示するように、HALBAUで出たCL3と一緒にするほうがどちらかというとしっくりくるように思う。（その他の項目はどちらでもあまり差がないように思う。）

¹ 距離データとして扱った場合のデンドログラムを参考までに本稿末尾に掲載する。

² K-meansによる。クラスター数は2個、3個、4個の3通りで処理した。

³ ALSCALによる。

表1 複数の統計処理による CL 構成項目の比較

	階層的クラスター分析		非階層的CL分析 (K-means)		
	HALBAU	SPSSで行列を距離扱いで処理	行列を距離扱いで2CLで処理	行列を距離扱いで3CLで処理	行列を距離扱いで4CLで処理
CL1	1-5,8-10,14,17-19,21-26	6-7,16,27-29,32-33,37-38,43-44	2-3,8-,10-14,31,34-37,39-42	1,3-6,9,17-19,21-26	1,4,6-7,16-17
CL2	6-7,15-16,20,27-33,37-38,43-44	11-13,35-36,39-42	1,4-7,9,15-30,32-33,38-,43-44	2,8,10-14,35-37,39-42	2-3,5,8-10,18-19,21-26
CL3	11-13,34-36,39-42	1,3-5,8-10,14-15,17-26,30-31		7,15-16,20,27-34,38,43-44	15,20,27-34,38,43-44
CL4					11-14,35-37,39-42

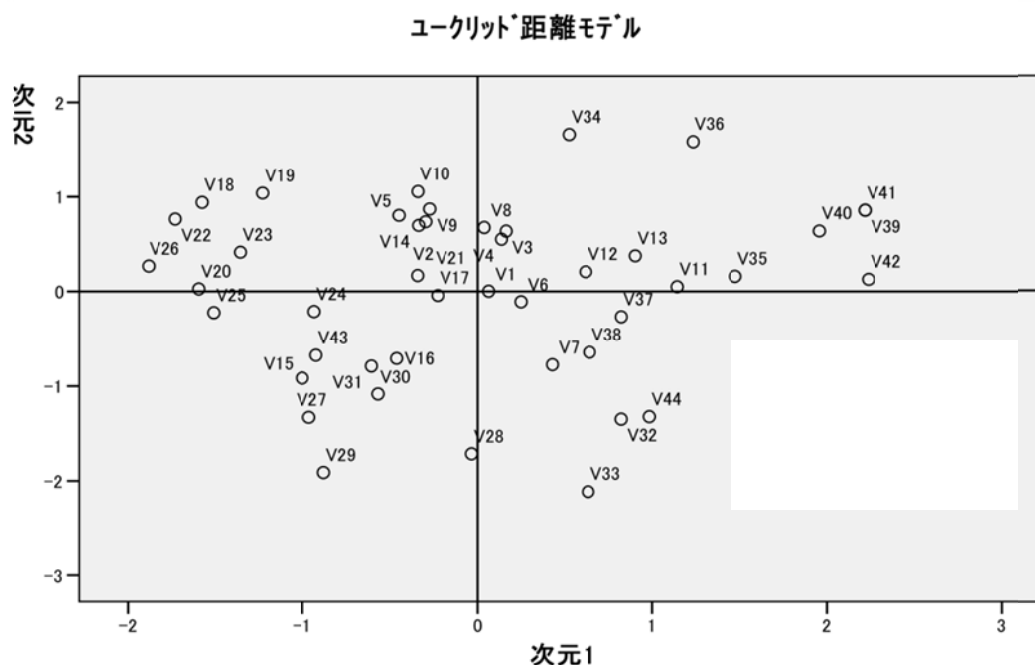


図1 MDS (SPSS の ALSCAL)で処理した結果、誘導された刺激布置

5. その他の気付き

連想順・重要度順 インタビューを見終えた後で見直してみたところ、重要度順の最後にあった「在米イラン人」を7番目に想起していたり重要度順の最初にあった「狭義の日本語教育にとらわれない」が後ろのほうに（36番目）あったりしたのが意外だった。また、想起順に見てみるとそれはそれでなぜこういうふうに思い浮かべたのか被検者としては理解できる場所がある。この並び順で話を聞かれていたらそれなりにまとまりのある話になっただろうと思ったし、多少思い浮かべるイメージにも影響を与えるのではないかという気がした。（例：「社会にとって役立つ」の意味合い。）

デンドログラムでは各連想語が上下に連なって提示されるが、このことは、その並び順が被検者のイメージ想起に影響を与えている可能性も示唆するだろう。

刺激によって想起されるイメージの総体としての大きさ 個別質問の際にも私は個々の項目をみてイメージしたことを述べていたが、個々の項目についての単なる補足質問ではなく、このようにイメージを喚起するような聞き方をされるとさらに多くのイメージが想起されることに驚いた。ここで挙げられたイメージについてさらに解釈を求める形でインタビューを継続すると実はもっと話が広がる可能性があるようだ。時間の制約がない時にじっくりと内藤先生がインタビューなさったらどのようなインタビューに発展していったのか非常に興味がある。

このことは、この刺激は私にとってはかなり大きな内容についてのイメージ想起を求めるもので、いくらでも話せるのかもしれないという印象を受けた。リサーチクエスションと刺激の関係の強さ・重要性を改めて感じるとともに、両者の関係性は実施者側からはなかなか想像しにくい側面が含まれていること、その意味でもかなり時間に余裕を持って実施しないとならないこと、協力者の側もそれに応えるだけの心身の余裕があるか（やる気を感じてもらえるか）ということが大きくインタビューの成否に影響すると感じた。

それに加えて、このことは刺激とリサーチクエスションとの関係の妥当性が第三者にとって判断しにくいものになる可能性を示唆するだろうと考えた。そうであるとすれば、論文などで成果を公開する際には、刺激とリサーチクエスションとの関係性を丁寧に説明し、妥当性を第三者にもわかりやすくする努力が重要となるだろう。

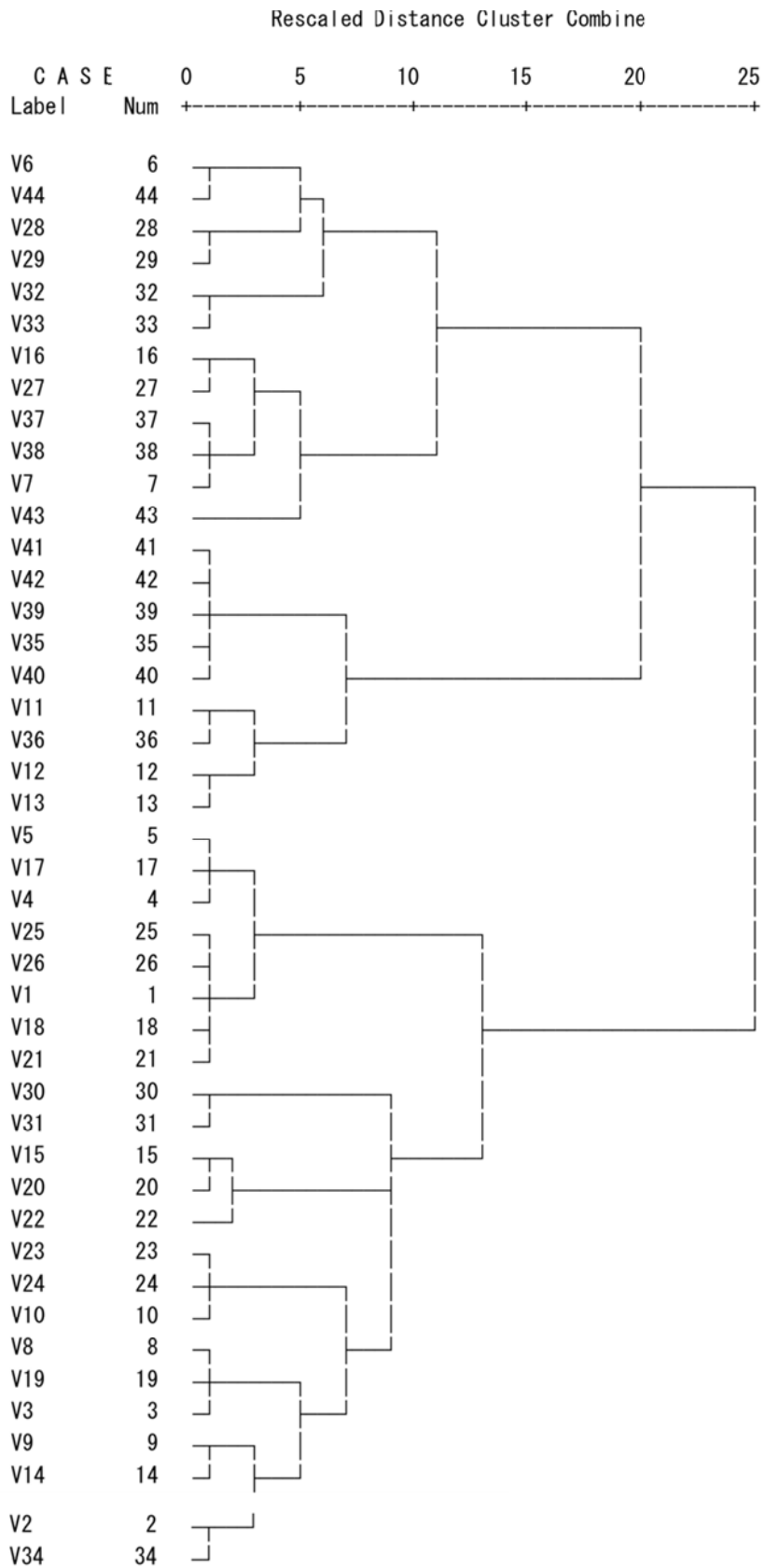


図 2 SPSS で階層的クラスター分析をして描いたデンドログラム

PAC 分析と質問紙調査の併用によるノンネイティブ日本語教師の ビリーフ研究 ―あるタイ人教師の事例より―

○嶽肩志江(横浜国立大学留学生センター)

○坪根由香里(大阪観光大学観光学部)

小澤伊久美(国際基督教大学日本語教育課程)

八田直美(国際交流基金日本語国際センター)

key words: ノンネイティブ日本語教師、ビリーフ、質問紙調査

はじめに

本研究は日本語を母語としない日本語教師（以下、NNT）のビリーフ調査を量的・質的両面で行い、日本語を母語とする教師の結果とも比較し、将来的に教師研修への提言を行うことを目的とした研究の一部である。

これまで教師の教育観、学習観等に関するビリーフを調べた研究は質問紙を使った量的調査が多いが、質問紙調査（以下、質問紙）からは特定の項目についての意識は探れても、教育観、学習観といったビリーフはそれらの結果から推測されるものに過ぎない。また、質問紙がビリーフに関するあらゆる項目を網羅することは不可能である。さらに、質問紙から明らかにできるのは、本人が意識していることであり、その回答と行動との間に矛盾やずれが生じる場合もある。一方で、研究者が選定した特定の項目について協力者の意識を探りたい場合、あるいは、複数の協力者すべてに同じ質問に対する回答を求めたい場合などは、質問紙は有効である。PAC 分析は自由連想による連想語に基づき、協力者主体で語られることから、質問紙の結果を PAC 分析と照合することで、質問紙から推測されるビリーフが PAC 分析で語られるエピソードの中で具体的な形になったり、逆に矛盾とも言える部分が見られたりする可能性がある。そこで、本研究では、質問紙と PAC 分析を用い、質問紙の結果からどのようなことがわかるか、その結果を PAC 分析のインタビュー内容と照合させてどのようなことがわかるかを分析し、質問紙のみでは読み取れなかった部分、PAC 分析だけでは特定できなかった部分を探ろうと考えた。

筆者らは、タイの大学で教える経験 1 年未満の教師 4 名（以下、新人）と経験 15 年以上の教師 4 名（以下、経験）を対象に、ビリーフ質問紙調査と PAC 分析を実施し、「いい日本語教師」に関する

意識を探った。坪根・嶽肩・八田・小澤(2010)ではタイ人新人・経験教師共通に見られる特徴として学習者と深く関わろうとする姿勢が見られることを挙げ、さらに、新人の特徴として、わかりやすく面白い授業を求め、学習者のコメントや評価から授業改善を行い、学習者との距離を近くして授業活動に反映させようとする、経験の特徴として、日本事情・日本文化や異文化理解に対する意識が強く、学習者の過去や将来まで見据えた対応をしていることを挙げて説明している。しかし、ここでは質問紙の結果については触れておらず、新人・経験としてまとめたために教師個人のビリーフを丁寧に見ることはできなかった。

本発表では、8 名の教師の中から、経験教師 1 名について、質問紙の結果と PAC 分析のインタビュー内容を照合することで、どのようなビリーフが見えてくるか分析する。その上で、質問紙と PAC 分析を組み合わせて分析することによるメリットについても述べたい。

調査方法

●調査協力者: タイの大学で教えるタイ人日本語教師 1 名（以下、教師 F. 日本語教育歴 15 年以上）

●提示刺激:

あなたにとって「いいタイ人日本語教師」とはどんな教師ですか。その教師は教室内外でどんな振る舞いをすると思いますか。また、あなたは、その教師に対してどんな気持ちを持つでしょうか。それから、その教師は日本語教育についてどんなことを考えていると思いますか。

そういったことを含めてあなたが「いい日本語教師」という言葉を聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください。

●手続き: 2009 年 9 月に内藤(2002)に従って PAC 分析を実施し、インタビュー終了後、質問紙調査を行った。質問紙は、第一部(35 問)、第二部(21

問)、第三部 (12 問) がビリーフに関する質問で 5「賛成」、4「どちらかという賛成」、3「どちらともいえない」、2「どちらかという反対」、1「反対」の5つの中から選ぶ形になっており、第四部は協力者の属性を問う内容になっている。

●使用分析ソフト:HALBAU7 (ウォード法)

結果

今回取り上げた教師 F の非類似度距離行列とデンドログラムを以下に示す (表 1、図 1)。紙幅の都合上、ポイントを絞って結果を示す。また質問項目も記述内容に該当するもののみ掲載する。

以下、質問紙¹からわかる教師 F のビリーフの特徴を PAC 分析での語りと照合して分析する。

1. 教室内で扱う日本語の丁寧さ

質問紙からの解釈 <くだけた表現や流行り言葉の授業での扱い> <教師が話す際の省略・倒置の使用>については肯定しており、日本語の授業では日常的によく触れるものを示したほうがいいと考えている。ただし、<教師が話す際の「です・ます」体の使用>に 4「どちらかという賛成」、<教師が話す際の助詞の省略>には 2「どちらかという反対」であることも併せて考えると、教師の発話、授業で扱う表現は丁寧で規範的なものが基本だが、そのようなものに限定せず多様であったほうがいいという考えのようだ。しかし、

表 1 調査協力者 F の非類似度評定結果

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①								
②	4							
③	4	4						
④	7	7	7					
⑤	7	7	7	7				
⑥	7	7	7	7	2			
⑦	7	7	7	7	5	2		
⑧	7	7	7	7	7	2	4	

【 クラスター分析 ---- 基準：ウォード法 】

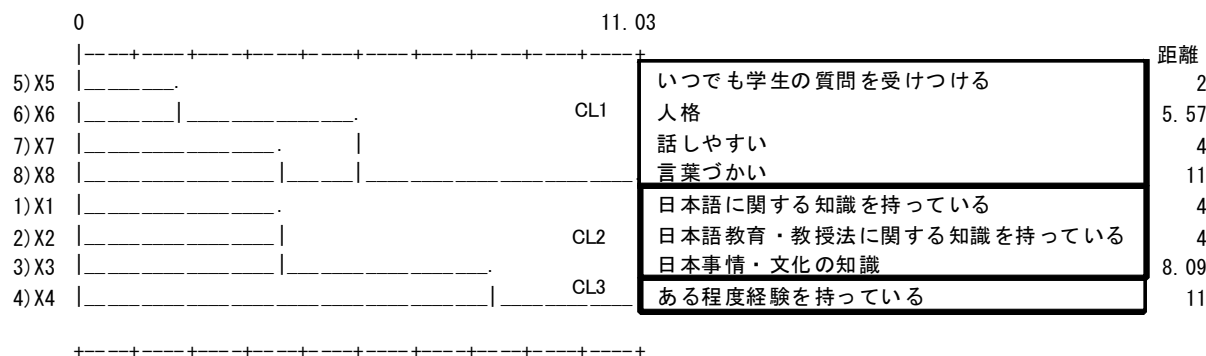


図 1 調査協力者 F のデンドログラム

<教師が話す際の縮約形の使用> <教師が話す際のカジュアルなスタイルの使用> <初級からカジュアルなスタイルの言い方を教える>に関しては 3「どちらともいえない」と答えており、常にカジュアルな形が必要だと考えているわけではないようである。つまり、くだけた日本語使用はよいと言っても限度があると考えているのであろう。

PAC 分析も合わせた新たな解釈

クラスター(以下 CL)1 項目 8 「言葉づかい」
 いい言葉づかいをつかう、をすると、学生も、あー、接しやすい、あー、まあ、あんまり怖がらずに、先生のところに、来ているんな、ことが、話せる、何でも話せるという、気持ちを起こさせる、要因があります。 <中略> 乱暴な言葉じゃない、意味と、もう一つは、まあ学生に対して、思いやりとか、優しさを、表す、ような、ものもあの一、この中に、入っていると思います。

→教師の発話、授業で扱う日本語は多様であってよいという考え方だが、教師が使用する日本語については、丁寧なものを基本とした上での多様さと考えているようだ。タイ社会では教師が権威ある存在だが、教師が学生に対して丁寧な言葉遣いをすることで学生が接しやすくなり、学生との距離が縮まるという意識が働いているからであろう。この言葉遣いに関しては、PAC 分析では丁寧な、思いやりや優しさを表す言葉遣いにすべきだと述べられているのみだが、質問紙を併用することで、くだけた表現、カジュアルなスタイル等も含めて、教室でどのような言葉を使用し授業で扱うべきかに関する意識も読み取ることができた。

2. 教師の人格

質問紙からの解釈 前述の通り、タイ社会では教師が権威的な存在であり学習者にとって近寄りやすい存在とは言えない。しかしながら、教師 F は <明るい雰囲気での授業> (4「どちらかという賛成」、<ユーモアや笑いは学習促進に効果的>

¹ 以下、質問は短くまとめて<>に入れた形で示す。

＜学習者が積極的で反応があるクラス＞＜教師と学生が打ち解けた雰囲気での授業＞（全て 5「賛成」）について肯定しており、教室の雰囲気は明るく、教師とも打ち解けた楽しいものでありたいという意識があるようだが、その反面、＜厳格な雰囲気での授業は学習促進に効果的でない＞という質問には 3「どちらとも言えない」と答えており厳格さもある程度は必要だという認識のようだ。また＜教育技術より教師の人間性＞には 3「どちらとも言えない」と答えており、教育技術、教師の人間性のどちらも必要であるという意識が伺える。

PAC 分析も合わせた新たな解釈

→前述の学習者の立場に立ち、距離を縮めようとする教師 F の意識に加え、＜勤務時間外の仕事も必要なら取り組む＞にも強く賛成している。これらの意識は、PAC 分析の CL1 の中で、教師に求められる人格（思いやり、やさしさ、温かさ、親のイメージ）や学生との距離を縮めるために教師がすべきこと（学生の立場に立ってどうしてほしいか考え行動する。例えば、いつでも学生の質問を受け付ける、学生の言い分を聞き、気持ちをなるべく理解する、頼みをできるだけ聞いてあげる、授業中に堅い話だけではなく学生を笑わせたりして親近感を感じさせるようにする）として述べられている。一方で、PAC インタビューで語られた恩師のエピソード（授業時間外に学生を一人ずつ呼び、質問を受け付けていた）からは、教室ではなかなか質問をしないタイ人学生への配慮が必要であるという認識と、できるだけ学生の質問に答えるようにしてはいるものの、現実としてはなかなか同じ事はできないという現状とのギャップが見えてくる。これは＜授業時間外での補習や個別指導で学習者間の力の差を補う＞ことに 3「どちらとも言えない」と答えていることに関係している可能性もある。また、＜厳格な雰囲気での授業＞に 3「どちらとも言えない」と答えているのは、インタビューからわかるタイにおける教師の権威が関連するかもしれない。学生との距離を縮めつつ、教師としての威厳をどう保つかということも意識しているためではないだろうか。これらは確認が必要な点である。

3. 日本語・日本についての知識

質問紙からの解釈＜NNT の日本に関する情報の必要性＞＜NNT の日本語の知識の必要性＞＜教師のインターネットリソースを活用する能力＞は 5「賛成」、＜NNT の日本滞在経験の必要性＞が 4「どちらかという賛成」であり、日本語教師は

日本や日本語に関する情報や知識を多く持っている方がいいと考えていることがわかる。またこうした情報や知識を得る手段としてインターネットが活用できた方がいいと考えていると推測できる。

PAC 分析も合わせた新たな解釈

CL2 のイメージより

まあ、ノンネイティブでしたら、日本語、そのもの、に関する知識がまずないとはいけません。＜中略＞で、知識というのは、ま、日本語そのものがもちろん、プラス、言葉を勉強するには、あの一、言葉だけじゃなくて、事情、文化、文学↑、それに関連する分野も、知識があるほうがいいです、ね。

CL2 項目 1 「日本語に関する知識を持っている」

- ・タイ人の場合、ノンネイティブの場合は、知識がないと、読むこともできない、何もできません、ので、これは一番大事な、ことだと思います。
- ・学生が、大学院まで勉強すると、かなり、昔と比べて、知識が深くなるので、教師のほうも、それについて、いかなければ、いかなければなりません。それから、日本語の、日本語そのもの、の知識だけじゃなくて、も、もっと専門的な、知識が必要。

→教師 F が質問紙で、日本語教師は日本や日本語についての情報や知識を多く持っている方がよく、インターネット等の手段を駆使した情報収集に賛成した意図が、PAC 分析のインタビューによって豊かに描写されている。NNT としては当然、日本語がわかっていないと教えられないし、資料等を読んで知識や情報を得ることもできないという教師 F の意識に加え、大学院に進学する学生の増加で、教師もより専門的な知識を持つ必要が生じているというタイの日本語教育事情も見えてくる。

その他に、日本語の文章などを読んでいる時や日本人との接触場面があった時に背景知識としての日本事情や文化がわかっていないと問題が生じる可能性があるため、そうしたことも学生に伝えておく知識が必要と考えているのである。このように質問紙では漠然としていた「日本についての情報」という表現が、教師 F の中で具体的にどう捉えられているかが明らかになった。さらに、知識に類する連想語だけで CL2 が形成されるほど教師 F が強く意識していることもわかる。

4. 経験の必要性／経験の意味

＜教師の力量は、教職経験年数に比例＞は 4「どちらかという賛成」で、とりたてて強く賛成しているわけではないが、PAC 分析では項目 4「ある程度経験を持っている」が CL3 を形成し、インタビューでも経験が大事だと再三述べており、一見両者は合致しないように見える。しかしながらインタビュー内容を詳細に見ると、教師 F にとって必要だと考える「経験」とは、長い経験という意

味ではなく、教師の自信がつく程度の経験を意味することがわかった。

PAC CL3 のイメージより

知識、があっても、経験がなければ、どういうふうに、授業をしたらいいか、分からないので、経験、が、あるほうが、いいですね。でも<中略>そんなに長い経験の必要はありませんが、ある程度あれば。

(「ある程度というのはどれぐらいか」という問いに対して)年数では言えませんね。年数が短くても、密度、が濃い、場合は、まあ、経験があつて、自信が、つく程度。

教師Fのクラスターのイメージ描写では、「経験」は熟していく果物やひと雨ごとに色が変わるアジサイに喩えられ、経験を積むたびに教え方がよくなると捉えられており、教師F自身も経験の積み重ねから教え方を模索している様子が窺えた。

さらに、3節で述べた日本語教師にとって必要不可欠な「日本語・日本の知識」は、適切な方法で伝える「教授法」を身につけないと生きてこないこと、また知識や教授法への認識が不足していても4節で述べた「経験」によって何とか補ってきた教師F自身の状況と未だ自信が持てずにいる心情がインタビューと併せて分析することで浮かび上がってきた。

PAC CL2 のイメージより

それから知識だけでは自分がいくら知識を持っていても、あの一、伝え方が分からなければ、学生には、その知識がうまく、つた、伝わらない、ので、この3つの知識に、教育法、教授法、の知識がないと。

PAC CL3 のイメージより

でも、教えることに関しては、まだまだ、自信がないところがあります。<中略>文法に関しては、その一、これ、これまでの経験、ある程度積み重ねてきて、自信になった、けど。<中略>でも、読解とか、あとは、教授法はほとんど、習ったことがなかったので。

こうした思いが、質問紙の<新たな教授法に関する情報収集><職場内での研修会・勉強会><新たな教授法や活動方法の実践><研修会への積極的な参加>への5「賛成」という回答や、以下の発話につながっているようである。

PAC CL2 項目2「日本語教育・教授法に関する知識を持っている」

自分が持つてる知識のほかに常に新しい知識も、求めなければいけない精神、を持つべき。教育、教育者として。

紙幅の都合で紹介できなかったが、教師Fが日本へ留学している間に、タイの教育制度が変わり、入試制度の変更やそれに伴う学生の質の変化、そして日本語教師に求められる専門分野の知識の変化などタイの日本語教師もそれらの変化を受け止

め対応していかなければならない事情がある。教師Fは自分自身の労働環境の変化を大きなものと感じており、個人としても日本語教育全体としてもそれにどう対応していくかを課題として受け止め、行動を起こさねばならぬと感じているようだ。

総合考察

以上、分析の一部を紹介したが、このようにPAC分析と質問紙を組み合わせることで、

- (1) 質問紙だけでは推測でしか言えなかったビリーフが、調査協力者本人による説明や具体的なエピソードにもつなげて説明できる。
- (2) PAC分析と質問紙を照合することによって、一人の教師の中のビリーフのゆれや矛盾とも言える部分、理想と現実とのギャップが浮かび上がって来る可能性がある。これにより多面的な解釈が可能になり、ある教師のビリーフをより立体的に描写することができるようになる。

本研究の試みにより、タイ人日本語教師Fの中にあるビリーフをより具体的に描写することができたとともに、ゆれと思われる部分も浮かび上がった。しかし、PAC分析と質問紙を照合してもなお、あるいは照合したことにより、教師Fの意図が明確に読み取れなくなる場合もあった。したがって、より深く教師Fのビリーフを理解するには、このような複数の調査分析を踏まえた上で、さらにフォローアップ・インタビューを行うことが必要であろう。

*本稿は、平成21-24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「量的・質的ビリーフ研究から海外ノンネイティブ日本語教師の研修に必要なものを探る」(研究代表者:坪根由香里、課題番号:21520549)の取り組みの一部である。

文献

- 坪根由香里・嶽肩志江・八田直美・小澤伊久美(2010)「PAC分析によるタイ人新人・経験日本語教師の『いい日本語教師』像の比較」『2010世界日語教育大会予稿集』
- 内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版

(Yukie TAKEGATA, Yukari TSUBONE, Ikumi OZAWA, Naomi HATTA)

俯瞰夜景に対する心理的評価構造に関する研究

土田 義郎

金沢工業大学 環境・建築学部

key words: 俯瞰景観、夜景、エレメント

1. はじめに

現代は、人々の生活時間の多くが夜間にあり、都市の景観においても、夜景の重要性が増している。都市の魅力のシンボルとして、ランドマークとなる建造物（タワーや橋など）のライトアップが多く見られている。山や高層の建物から景色を俯瞰する場所も地域の名所としての位置づけがされるようになっている。

では、どのような夜景が美しいと感じられるのであろうか。光の色や量、配置などによって夜景の印象には相異が見られるが、その評価の構造は十分明らかになっていない。また、省エネルギーが重要視される時代背景もある。都市全体としてはライトダウンされた状態でも、まちの魅力の一つとして夜景は存在している。できるかぎり美しいと感じられる夜景を実現していくことが求められる。

ここでは、これらを踏まえて俯瞰夜景に対する心理的な評価の全体的構造の明確化を目的としている。現代の夜景づくりの基礎資料につながることを目指す。

2. 方法

2.1 提示刺激

PAC分析では提示刺激文に対して自由連想した内容を通常用いるが、ここではあらかじめ用意した画像を比較項目とした。写真集から選んだ写真による実験（実験1）と、石川県内で実際に撮影した夜景写真を用いた実験（実験2）を行った。

写真集¹⁾から集めた画像を図1に示す。各写真の撮影条件は明記されていないために不明である。写真はスキャナでパソコンに取り込み、トリミングによって表示画素数を2969×2969(pixel)に統一した。

石川県内で実際に撮影した箇所は8箇所であり、図2の12枚である。同じ場所で方向を変えて撮影したものもある。ホワイトバランスはオ

ート、測光モードはマルチパターン測光、焦点距離18mmである。画素数は2000×2000(pixel)にトリミングした。

これらの画像はインクジェット・プリンターによって写真用光沢紙に印刷した。印刷の際には、元の写真との乖離がなるべく小さくなるように、プリンタドライバを用いて明るさやコントラストを調整した。サイズは一辺20cmの正方形としている。

2.2 実験手順

本実験では、10代2名、20代8名、30代2名、40代2名、50代1名の計15名を被験者とした。前述のように自由連想を用いてはいたため、連想のための刺激文はない。また、重要度を聞くのも不自然である所から、それぞれの画像を、実際の夜景として評価したときの「美しさ」と「好ましさ」という視点で評価させている。

手続きとしては、まず、用意した写真をランダムな順序で見せる。それぞれの俯瞰夜景の「美しさ」と「好ましさ」について5段階評価を行った。次に2枚の写真を見比べ、類似度を判定させた。これを12枚の写真全てについてランダムな順序で一対比較した。この手続きは筆者の作成したPAC-assist²⁾を用いている。

得られた非類似度行列をフリーソフトのR³⁾を用いてクラスター分析（ウォード法）にかける。デンドログラムを見ながら被験者と話し合い、まずはまとまりのよいクラスターを示してもらった。次いで、クラスター内での共通点を被験者にたずね、基本となる認知構造を得た。それに加えて、より本質的な認識に近づけるために、クラスター同士の相違点にも着目させた。

さらに、美しさ・好ましさの評価が高かった写真や低かった写真について、その理由をたずねることで認知構造のより詳細な点を明らかにすることを試みた。これらを総括することで、個人の夜景に対する評価全体的な認知構造を推定する。

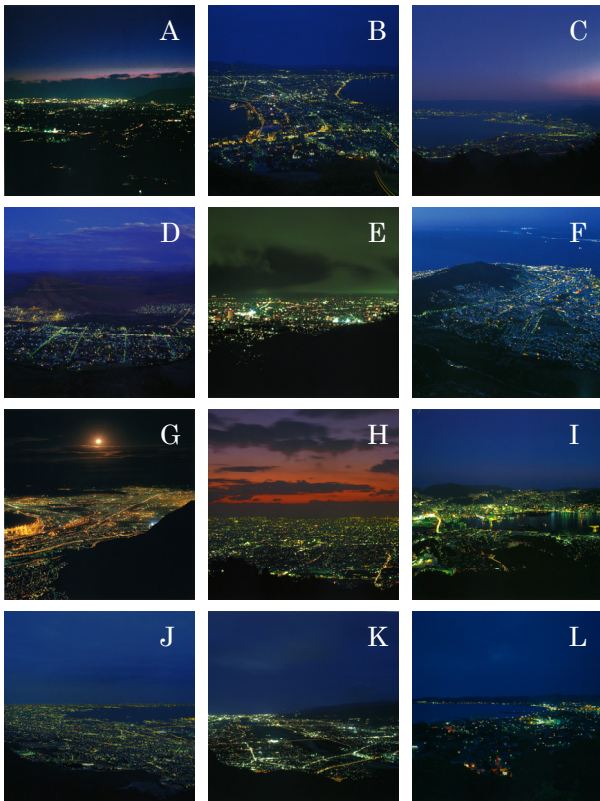


図1 写真集から選択した夜景 (A~L)



図2 撮影した夜景 (a~l)

3. 結果

3.1 実験1: 写真集を用いた実験

まず、美しさと好ましさを評価の平均を図3、4に示す。プロットのひげが標準偏差を表す。美しさの評価ではGとIが高く、A、C、Eは低い。好ましさを評価でも同様である。美しさと好ましさを評価は、細かな点で好みには差が見られるが、概ね等しいといえる。

好ましさと美しさの標準偏差を比べてみると、好ましさを標準偏差に全体的に大きめの値となっている。これは、美しさよりも好ましさをの方が個人差が大きいことを示している。

美しさの標準偏差ではHの夜景で大きく、Cの夜景では小さいということがわかった。Hの夜景は空の色が特徴的だったことの影響が考えられる。Hだけが空の色が赤く夕焼けのようになっており、そういった空の状態に対する評価によって、判断に差がでたのではないかと考えられる。またCの夜景は、湾や空の範囲が多く青色のイメージが強い夜景となっている。色や明るさに変化がなく、やや単調な印象をもたらしていることが影響している可能性がある。

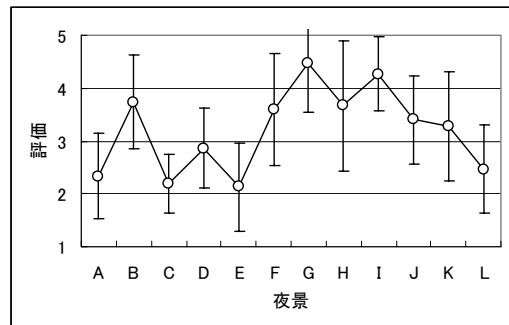


図3 美しさの評価

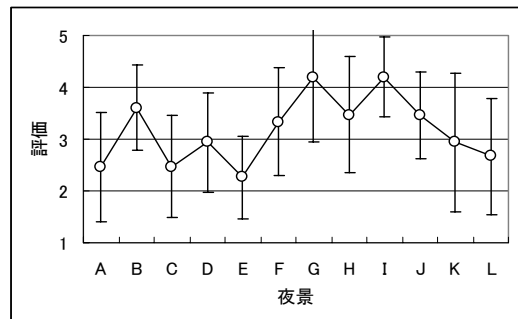


図4 好ましさを評価

次にデンドログラムにインタビュー結果を書き込んだものの例を図5に示す。A・E・Hのように四角で囲んだ部分は同じクラスと判断

されたことを示す。夜景の共通点や他のクラスタとの相違点を右側に、夜景そのものを評価した言葉を左側に示している。

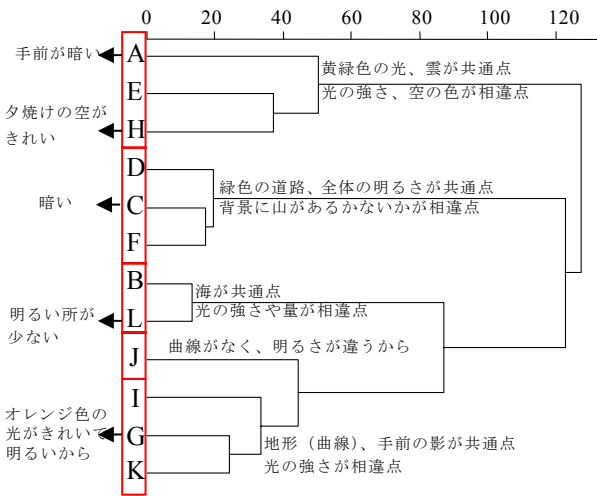


図5 被験者1のデンドログラム

被験者間で多く共通するのは、「空の色」、「光の色」、「光の範囲」、「角度」、「地形」といった事柄であった。これらは夜景の類型判断のうえで重要な要素と考えられる。

評価語のうち、頻度の高いものを肯定的・否定的に分けて表1に示す。

肯定的評価語の中から建築的な要素を含む表現を挙げると「光が広範囲に広がってきれい」、「光にコントラストや強弱がある」、「道路の光がきれい」などである。「光が広範囲に広がってきれい」では俯瞰点からの距離の影響が考えられる。「光にコントラストや強弱がある」では、ライトアップ地域を作ることが美しさに繋がる可能性が示唆される。「道路の光がきれい」については、街路灯の光色や並び方、車のテールランプなどが影響すると考えられるが、安全面への考慮が必要であり、美的な観点からだけで変えるのは難しい。

否定的評価語には、「暗い」、「光が少ない」、「光の範囲が狭い」などである。これらは都市全体の光の量だけではなく、俯瞰する地点からの距離にも関係していると考えられる。

表1 頻度の高い評価語 (実験1)

肯定的評価語	数	否定的評価語	数
光が広がってきれい	9	暗い	14
光が水面に反射してきれい	8	光がはっきりしてない	8
光にコントラストがある	8	光が少ない	7
空の色が好き	7	空の色が嫌い	7
街がきれい	7	光の範囲が狭い	3
道路の光がきれい	6	さびしい感じがする	3

3.2 実験2: 石川県の写真を用いた実験

美しさと好ましさの評価を図6、7に示す。どちらの評価も概ね等しいのは実験1と同様である。被験者の評価の個人差の傾向も実験1と同様であった。

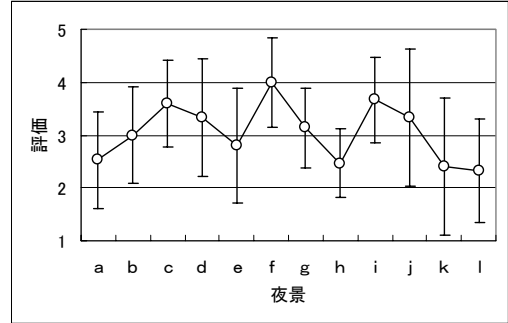


図6 美しさの評価

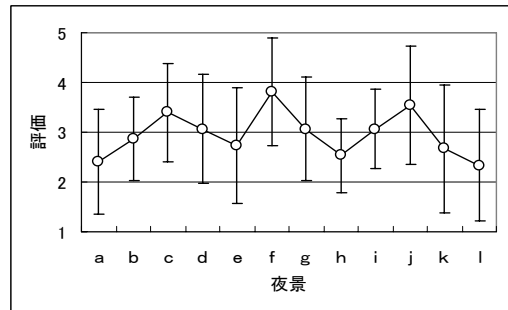


図7 好ましさの評価

次にデンドログラム例を図8に示す。実験1と同様に光の明るさや色、空の色に着目している様子がうかがえる。ただし、実験1で見られた夕焼けの空がきれいという表現は、そのような対象がなくなったことで見られず、代わりに木の影がきれいという表現が見られた。

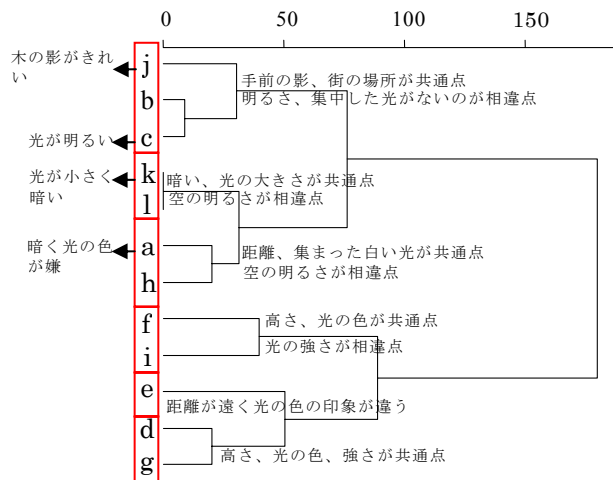


図8 被験者1のデンドログラム

全員についての類似点と相違点で共通しているのは「光の明るさ、強さ」、「光の広がり方」、「光の範囲」、「距離」、「空」、「木の影」などである。その内「光の範囲」と「空」が実験1と共通している。相違点としては実験1では、「角度」や「地形」のような場所や条件が挙げられたのに対し、実験2では「木の影」という自然物に関する言及が見られた。

これらを肯定的（否定的）評価のうち頻度の高いものを表2に示す。

肯定的評価語のうち建築的要素を含む表現には「道路の光がきれい」、「シンボルがある」、「建物からの光がきれい」などがある。「道路の光がきれい」は実験1と共通している。「広範囲の光」や「水面に反射した光」など光の状態表現が実験1では多かったのに対し、実験2では建物からの光やシンボルとなるものなど、都会的な要素につながる表現が多かった。

否定的評価語では、「暗い」、「光の範囲が狭い」、「光の量が少ない」が実験1と同様であった。しかし「建物の形が見えて嫌」、「家、電柱、木の影がある」といった新しい視点も見られた。「木の影」については、肯定的・否定的のどちらにも多く、見せ方によって評価が全く異なる可能性があることが示唆された。

表2 頻度の高い評価語（実験2）

肯定的評価語	数	否定的評価語	数
光が強い、明るい	8	暗い	17
光の色がきれい	7	家、電柱、木の影がある	7
木の影がきれい	7	光の量が少ない	3
道路の光がきれい	6	建物の形が見えて嫌	3
建物からの光がきれい	4	光の範囲が狭い	3
シンボルがある	4	霧が嫌	2

4. まとめ

以上の2つの実験から、美しさ・好ましさを表す基本的な認知構造を推定した(図9)。光の数と光の範囲といった評価は肯定・否定どちらの評価語にも現れる対になった評価である。光の数では、数が多いと美しく少ないと美しくない。しかし、光にメリハリをつけることで好ましいという評価につながる可能性もある。光の範囲でも光に強弱の差をつけることで好ましさにつながる。よって、光の数や範囲を多くしなくても好ましい夜景を形成できることが示唆される。美しいという評価につながっている評価に関しては、光の量、光の色、街路構造といっ

たものが関係していると考えられることから、山や高層の建物から俯瞰する夜景に対して美しいものの要素として考えられる。

また、オレンジ色のような特徴的な色の光を用いたり、シンボリックな対象物を目立たせることで美しい夜景を実現できると考えられる。道路の光は安全上変化をつけることは難しい。しかし、道路の光を中心として周りの光に強弱をつけ、道路をシンボルとすることで、軸線の明確な美しい都市夜景を創生することも考えられる。

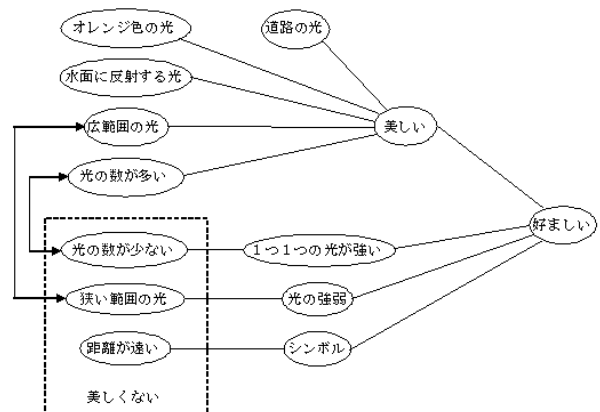


図9 共通する認知構造

文献

- 1)丸田あつし：丸田あつし写真集 LIFESCAPE 息づく夜景, 角川書店(東京), 2001.12.05.
- 2)土田義郎：PAC 分析支援ツール, <http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>, 2010.11.04 現在.
- 3) The R Project for Statistical Computing, <http://www.r-project.org/>, 2010.11.04 現在.
- 4)乙部暢宏、鍵野壮宏、後藤春彦、李永桓、李彰浩：都市における俯瞰夜景の景観認識に関する基礎的研究 東京都心を対象として, 日本建築学会計画系論文集, No.606, pp. 107-114, 2006.
- 5)天谷華子、山崎正史：夜間眺望景観の構図論的考察, 都市計画論文集, Vol. 35, pp. 751-756, 2000.
- 6)渋谷敬一、小林隆史、大澤義明：都市夜景の俯瞰景に関する計量分析 函館市を対象として, 都市計画論文集, Vol.39, pp. 187-192, 2004.
- 7)吉沢望、石原従道、平手小太郎：夜間における都市公共空間の景観印象評価に関する研究 日本建築学会計画系論文集, No.550, pp.15-22, 2001.

(Yoshio Tsuchida)

教師の自己成長を促すピア-PAC 分析

—PAC 分析の応用可能性—

○小熊貞子・遠藤藍子・田仲正江
(東京農工大学・昭和女子大学・東京国際大学)

key words: 自己研修型教師, 内省的実践家, ピア-PAC 分析

1. はじめに

近年、日本語教育の分野では、教師自身の「自己教育力」、「自己成長」が問われている。自己教育力とは、研修や経験を積んだ教師などから受ける外部からの教育に頼るのでなく、教師自身が自らを教育する力である。「教師の成長」は、その自己教育力を身につけることによって実現できるという(川口・横溝 2005)。では、自らを教育し自己成長するためにはどうすればいいのだろうか。川口・横溝(2005)は成長を目指す教師すなわち「自己研修型教師」に最も求められることとして、自分の教育の在り方を客観的に把握することを指摘している。また、岡崎・岡崎(1997)は自己研修型教師の育成には自分を作り上げている枠(教育観)を知ることが必要だと述べ、さらに授業改善を進める上での「内省」という概念を提示し、その内省を実践する自己研修型教師を「内省的実践家」としている。

これらを踏まえ、筆者らは自己を客観的に見つめる「内省的実践家」を目指し、同じ大学の学部で同一コース(科目)を担当する教師同士として、2009年、2010年の2回にわたり、自身の授業活動の内省を協働で実践することを試みた(遠藤・小熊・田仲 2010)。

実践に当たって内省の手法を模索し、PAC分析の手法を応用して取り入れることとした。PAC分析は内藤(2006)によれば、被験者がもつ「豊饒な内的世界」が「これを探索する中で」言葉やしぐさで語られるという(p.58)。筆者らはこの手法を用いれば被験者(筆者ら自身)の内的世界を言葉にして表出することができ、内面の思いが明確化され豊かな内省が可能になると考えた。また、「研究例2:学級風土の事例記述的クラスター分析」(内藤 2006:pp.113-136)にある「学級経営面の診断的解釈につながる材料だけでなく、連想項目や構造解釈の内容を吟味することで、教師自身の学級経営の傾向性の

分析や能力の診断にも活用できる場合のあることが明らかにされた」(p.136)との指摘は、筆者らの目的に重ね合わせられることから、豊かな内省の成果が得られるのではないかと考えた。これらの理由から内省活動におけるPAC分析の有効性を認め、取り入れることとした。

2. 方法

今回、内省活動の一環として実施したPAC分析は通常のPAC分析とは異なる部分がある。これは、筆者らが検査者として被験者の態度構造を了解し解釈した結果を成果とするのではなく、自身の内面を了解し、内省を得ることを成果としたことによる。すなわち、最も了解したいのは自分自身の内面であり、了解するために被験者となってピア(同僚教師仲間)の助けを借りながら自身の内面を探索し、語るのである。したがって、検査者と被験者は、研究する側とされる側の関係ではなく、交代で検査者と被験者の役割を果たしサポートし合うピアの関係との認識をもっている。

次に、内省活動の全体像と、活動におけるPAC分析の位置づけについて簡単に述べておきたい。内省活動は「データ収集の段階」と「データに基づく内省」の2段階から成っている。PAC分析はデータ収集の段階で実施した。さらにPAC分析で得たデータを基礎データとして分析し、内省へと進めた。以下では、このうちのPAC分析に焦点を当て、手法と成果を提示する。

参加者: 教師3名(T1,T2,T3 教師歴20年以上)

被検者: T2(教師歴25年)

提示刺激: 「今学期のクラスを振り返った時、頭にどんなイメージがわきますか。そのイメージを、もし絵に描くとしたら、そこにはどんなものやことや様子が描かれますか。」

手続き: ①連想項目の書き出し⇒②重要度順による並べ替え⇒③連想項目間の類似度評定⇒④③の結果情報の入力とデンドログラムの析出⇒

⑤クラスターに分けて命名⇒⑥デンドログラムに基づくピア・インタビュー⇒⑦デンドログラムとインタビュー・スクリプトに対するピア・レスポンス^(注)

使用分析ソフト：HALBAU7(Ver.2)

3. 結果

ここでは T2 を例に取り上げる。T2 は提示刺激から 13 項目を連想し、手続きを経てデンドログラム(図 1)を得た後、このデンドログラムから四つのクラスターを捉え、命名した。

	0	10.02	距離 (イメージ)	連想項目	〈群〉命名
1)X1			1.00 (0)	窓の外の本々が見え、外からの光が学生の姿を逆光で浮かび上がらす	
12)X12			1.00 (0)	ぼや〜んとしているが冷たくはないが熱くもない	〈第1群〉始まりのゼロ
13)X13			10.02 (0)	力はあるのに力を入らない学生の姿	ニュートラルなイメージ
2)X2			1.00 (+)	ぼやんとした中に浮かぶ光が点々と	
9)X9			1.00 (+)	輝きを増した学生の姿	〈第2群〉成長する学生
10)X10			1.00 (+)	授業外でタスク達成のために活躍している学生の姿	
11)X11			3.82 (+)	授業へのヒントを与えてくれた学生の姿	
4)X4			4.34 (+)	教師がグループに参加	
7)X7			1.00 (+)	学生が前で発表している姿	〈第3群〉成果発表
8)X8			7.31 (+)	学生がその人(発表者)に質問し、答え、爆笑	
5)X5			1.00 (+)	グループワークは中国語、発表は日本語という人達	
6)X6			2.24 (-)	中国語のはらん	〈第4群〉途中経過 努力
3)X3			10.00 (+)	3〜4人のグループが教室の中にできている	

図 1 T2 のデンドログラム

以下、「成長する学生」と命名された第 2 群について、デンドログラムを基に行ったインタビューの一部を記載する。(インタビュアー：T1)

(T1:その成長というのは、具体的には…) T2:あおう、全体に成長したな、ではなくて、もちろんそうなんだろうけれど、初めはすごく自信がなくて話せなかった学生が、タスクをした時に褒めたことがきっかけで、熱心に勉強するようになって、自分で成長していくとか。

〈中略〉(T1:全体ではないけれども非常にそういう学生が印象に残っているってことは、手ごたえはクラスの中で出た?) T2:クラス全体で手ごたえがあったというよりは、そういう手ごたえのある学生がはっきりわかったっていうか、いたっていいことですね。

インタビューで T2 は一人の学生(下線部)の成長を思い起こして具体的に語り、その学生を含めて手ごたえのある学生がはっきりわかったことを述べているが、クラス全体が底上げされたわけではないこともうかがえる(波線部)。

この後、T3 とのピア・レスポンスの中で T2 は「輝きを増した」のがクラス全員ではないことを再認識し、それが後悔であると語る。一方、「輝きを増した」以外の学生については次のよ

うに述べている。

T2:ただ、他の人が成長しなかったのではなくて、グループワークの中でそれなりの役割を果たしていたと思うんですね。(T3:それなりの役割というのは?) T2:だから、アイデアを出しーの、発表のものを構成しーの。

彼らがグループワークで協力者としての役割を担っていたことに、T2 はここで初めて言及し、成長を認め、肯定的に捉えたのであった。

4. 総合考察

今回の内省活動ではまず、手続き①から⑥に示す PAC 分析を行い、さらに⑦ピア・レスポンスを行って被験者の内省を促す工夫を加えた。ピアの助けを借りて協働で行う①から⑦の手法を、筆者らは「ピア-PAC 分析」と捉えた。

被験者は、同じコースを担当しコースに関わる事情を共有しているピアに向かって語り、ピアの問いかけに答えるという過程を繰り返すことによって内省を深めた。一方、被験者と関わることを通してピアもまた、被験者の内省の過程と成果を共有することが可能となった。

以上から今回提示した「ピア-PAC 分析」は、内藤の提示する PAC 分析の、新たな活用法として位置づけられるのではないかと考えるものである。

注

ここでのピア・レスポンスとは参加教師の一人が他の教師(被験者)に、データ(デンドログラムとスクリプト)を基に内容の掘り下げや確認の問いかけをすることを指す。

文献

- (1)遠藤藍子・小熊貞子・田仲正江(2010)「ピア・サポートを活用した内省的実践とその効果—「壁打ちモデル」による教師の自己研修—」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』2010年度日本語教育実践研究フォーラム 日本語教育学会(2010年12月公開予定) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/Forumhoukoku/>
- (2)岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習 理論と実践』アルク
- (3)川口義一・横溝紳一郎(2005)『成長する教師のための日本語教育ハンドブック上』ひつじ書房
- (4)内藤哲雄(2006)「PAC分析実施法入門[改訂版]」ナカニシヤ出版
(OGUMA,Teiko ENDO,Ranko TANAKA,Masae)